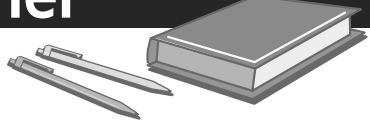


Book Review Corner

ブックレビューコーナー



① 櫻井よしこ 著

『何があっても大丈夫』

(新潮社)

著者は1945年ベトナムに生まれ、翌年両親と帰国。新潟の少女時代、ハワイ州立大学時代、クリスチャン・サイエンス・モニター紙勤務時代、1980年から1996年までのニュースキャスター時代。「何があっても大丈夫」前向きであればという母の言葉に導かれるように、母を中心とした家族との繋がりを分かりやすく記しています。

現在の著者はジャーナリストとして大宅壮一ノンフィクション賞受賞(1995年)、菊池寛賞受賞(1998年)。著者のものの見方、その活躍の原点が伺えるような回顧録です。 289.1-Sak (O.S.)



② 渡辺淳 著

『パリの橋—セーヌとその周辺—』

(丸善)

パリはセーヌ河を抜きにして語ることはできません。パリは中央を横断しているこのセーヌ河によって左岸は学術都市、右岸は商業都市と文化も二分されています。また、左岸と右岸を結ぶために橋も沢山かけられています。それぞれの橋には芸術家、自国の大統領や他国の皇帝の名前がついており、橋の名前だけでもパリの歴史が今もセーヌ河に映し出されているようです。

本書は、セーヌ河にかかっている個々の橋の歴史と兩岸のモニュメントを写真を織りまぜて説明しており、セーヌの流れと共にパリ史を眺めているような一冊です。

293.5-Wat (H.T.)

③ 佐藤弘樹 著

『英語+α ヨコ文字信仰タテ社会』

(光村推古書院)

本書の著者はFMラジオ局、α-Stationの人気DJであり、本学の教員としても教鞭を執っておられます。担当されているα-Stationの生番組であるα-MORNING KYOTO内では「ワンポイントイングリッシュ」のコーナーを開いておられ、英語に関する様々な疑問点を判りやすく解説されています。それをまとめたのが本書です。英語を勉強するということは、日本語を勉強することであると実感させられる1冊です。それにしても番組を聞いていて、このコーナーのエンディングで「なるほど!」と膝を打ったり、思わずニヤリとするのは私だけでしょうか?

830.4-Sat (T.F.)

④ 武光誠 著

『地名の由来から知る日本の歴史』

(ダイヤモンド社)

皆さんは自分の住んでいる地名の由来は何なのかなどと考えたことがありますか。

本書によりますと、今は飲食店が多く建ち並ぶ木屋町は材木屋が集まっていた所で、目の前に流れる高瀬川を舟で材木を運ぶのに利用していたそうです。他にも地名の由来は人々の信仰から生まれたものなど多岐に渡っています。「宮」や「神」の漢字が使われている場所は神社があったからなのかなと想像することができますね。

地名の由来を知ることによって、日本の歴史も学べる得する1冊です。

291.034-Tak (N.K.)